

「縁」に思うこと

関西EACの10年度活動は、会員各位の熱い参加意欲とOB会の皆様のバックアップに支えられ、年間例会延べ参加者が400名を超える盛況となり、今年度も1月21日の特別オープン例会から11年度の新たな活動をスタートすることができました。特に2011年は、関西EAC創立50周年という、半世紀にわたる歴史の記念すべき通過点となります。今年もOB会の皆様には尽きせぬご助力と温かいお見守りをいただきますようお願いいたします。かくいう私は3月に定年退職を迎えるため、関西EACも4月からはフレッシュな新体制で50周年の活動をプロモートすることになる予定です。いよいよ私個人は、40年のサラリーマン生活でどっぷり浸かった会社組織・ビジネスの人的ネットから大きく遊離し、今回お題の「無縁社会」がひたひたと身に迫るものとなります。

そこで、「縁」というキーワードで思いつくことを、今後の自戒の念もこめて書き連ねてみたいと存じます。

1. 「縁」のおしつけと孤立化

「うつ病100万人社会」とは、「無縁社会」をキャンペーンしたNHKが最近放送したフレーズです。無縁社会には、こうした病で孤立化する人々も多く含まれています。私が長崎に赴任していた時の話しですが、今でも悔やまれるケースがありました。

当時、私の部へ、国立一期の大学・大学院を卒業し海外留学経験もある将来嘱望される新人が配属されました。夏までの新人研修では期待に応える研修経過をみせてくれましたが、夏休みを利用して持病の消化器疾患を治癒させるために半月ほど入院することになりました。

元気な退院を望んで私もお見舞いに行きましたが、退院後の彼の様子は一変しました。元の明るさ、滄刺さは見る影もなく、不安そうに周りをキョロキョロする彼の目の中からは虚ろな精神状態がみてとれました。

原因不明のまま、うつ病と診断されたため、ラインへの仮配属は諦め、当分は後方支援のスタッフ部門に置きながら、私がマンツーマンで指導して回復を待つことにしました。まずは簡単な事務作業からリハビリを始めましたがEXCELも満足に操作できない状況が続き、毎日の作業実績を個人面談でフォローする中で、思わず私も声を荒げ、叱咤する場面が多々あったことを思い出します。

成果は一向に現れず、本人だけでなく私自身も指導についてカウセリングを受けたり、親御さんと相談したりと手を尽くしました。私の部に配属されたことで生じた、上司・部下もしくは先輩・後輩という「巡り合わせの縁」に基づく責任感で、なんとか元気とやる気を取り戻させたいとの一心でした。

今なら、こんな押し付け的なアプローチは、返って本人の無力感と自己嫌悪を亢進させるだけ、というのが会社のメンタルヘルス教室では定説ですが、いざ、自分がその現場に直面していると、こちらの一方的な想いの進りをコントロールできなかったのが本音です。

最終的には、毎日単位での改善兆候を求めるのではなく、もう少し長い目で見守ろうということで、彼のことを心配する先輩の若手社員や女性を誘って温泉旅行にでかけたり、職場のお父さん・お母さんのベテラン社員に気さくに声をかけていただく等に努めました。暫くして私が関西に異動になったときは、少し明るさも戻り、歓送会やカラオケなどでは楽しい時を過ごせるようになりました。

ただ、今でも当時のことを思い出すと、もっと接しようがあったのではないかと、悔やまれます。若干強引な今回テーマとの結び付けになりますが、たまたまの「巡り合わせの縁」に自ら縛られた過剰な干渉が、若者の心の孤立化を助長していたんだらうな、との反省しきりです。

2. 「縁」とふれあい

「無縁社会」の実相はよくわからないものの、「無縁」には、本人が「望む無縁」と「望まぬ無縁」があるような気がします。

本人が「望む無縁」は、自己責任に帰するということになりますが、実際のところは、「人・組織・社会とのふれあい」について億劫・臆病になっているという側面が多いのではないのでしょうか。フリータやニートなど、社会に帰属しないで自らのライフスタイルを極めていくというのもある種の「無縁」ですが、そうした人種ほど「インターネット空間での電脳的・オタク的なふれあい＝縁」を強く求めているように見えるのは私だけではないように思います。

このような側面には、なかなかついていけないので、私がそうはなりたくないと思っている「望まぬ無縁」について、我田引水の話をしたしたいと思います。

さて一番身近な縁といえば、家族の縁です。とくに配偶者との縁は、自分の一生の総決算で、幸・不幸では「幸い」が、泣き・笑いでは「笑い」がほんの少し多くを占めるようにしたい、ということの大きな要因を握っています。そこで女房との関係、即ち「ふれあい」を、いつまでも清新で飽きないものするために私が随分前から心がけていることを恥ずかしながら紹介します。

キーワードは「フィジカルコンタクト」、つまり体温をいつも直接肌で感じるふれあいの維持です。老体に鞭打ってエッチに励めというのではありません。

例えば居間にいて女房に隙あらばゴロニャーゴと転がり擦り寄っていく押し付けがましいコンタクトに励むことです。当然相手は一応いやがり「変態」などとののしりますが、まんざらでもない場合多く、たいがいは膝枕まで成功します。寝室もそうです。夫婦別室などというは有り得ません。同室同衾をキープし、いつでも女房にへバリついて寝られるという体勢が大切です。あたりまえのように足蹴にされますが、それも「また楽し」です。

実は、本当のスキモノとして、こうしたことをやっているのではなく、男が女に甘え擦り寄ることで、女がウンザリしているという構図が、男女の縁を新鮮で長続きさせることを、経験的に理解してきたから実行しているのです。その逆の構図はダメです。家庭崩壊・家族無縁の要因となります。

また、互いの体温を感じ合うということは、多分、遠赤外線効果での健康増進になり、互いに温かい血の流れた人間として尊厳を認め合うということでも優れたものだと思いますので、感じる所のある方は、是非実践ください。

もうひとつ、無縁社会の要因として、個人の過度の「自己実現」欲求から、その実現評価基準も定まらないまま自分探しの無限ループに入り、孤立化するという説があります。私も、会社・ビジネスの人のしがらみから離れ、「人との縁」が希薄になる中で「自己実現」欲求は減退しないようにしたいのですが、その中で「無縁地獄」に陥らないために、次のことに留意したいと思っています。

それは、「自らの行動が、これでいいのか」という自己実現の軌跡に対する自己点検を自分勝手な基準で行なわないで、社会的な外部基準で評価するように自律した目標管理をしていくことです。簡単に言えば勉強意欲による知力の実現は、公的な外部資格評価への参加で、運動意欲による体力維持は、クラブや同好会活動への参加で互いに相対評価しあう、というようなことです。こうした心がけが結果的に「人とのふれあい＝縁」を繋いでくれると信じています。

くどくなりますが、私の命が消え入るときは、せめて手のひらに人肌の温もりいう「縁」を感じながら昇天できればと願っています。そのときの人肌は女房のものでなくても一向に構わず、うら若き女性のものなら大歓迎です。

いつもガッシと女房の温もりを感じている筆者

